

千葉県山武郡横芝光町

中台 A 遺跡発掘調査報告書

—町道Ⅱ-1号線改良工事に伴う埋蔵文化財調査—

平成 22 年 3 月 31 日

横芝光町教育委員会

はじめに

本書は、平成 21 年 10 月 15 日から同月 22 日まで実施した、横芝光町中台 A 遺跡の発掘調査の報告書である。

今回の発掘調査は、中台 A 遺跡の中央部を走る町道Ⅱ-1号線改良工事に伴い、現道を拡幅する部分とその対象地となった。対象地は周知の遺跡の範囲内であるため、発掘調査が必要となり、町から文化財保護法第 94 条第 1 項による通知が提出された。これによって町教育委員会社会文化課によって、試掘調査を実施した。その結果、対象地から遺構及び遺物が確認されたため、県の指導により横芝光町教育委員会が発掘調査を実施した。

発掘調査は、教育委員会社会文化課生涯学習班文化財担当道澤が担当し、非常勤職員 4 名が補助した。

整理は、調査後道澤が当たり、これを上記非常勤職員が補助した。

報告書刊行後、調査データ及び出土遺物は横芝光町教育委員会で保管する。

調査に当たって、町都市建設課、施工の吉岡建設には協力を、町文化財審議会長西山太郎、原始文化研究所柿沼修平両氏からはご指導・ご助言をいただきました。記して御礼申し上げます。また、調査作業には非常勤職員 4 名、西山満里子・加藤スミ・鎌形由美・畔蒜有美子の諸氏の手を煩わした。ここに記してその労をねぎらいます。

目 次

はじめに

目 次

1. 遺跡の概要

(1) 遺跡周辺の地形

(2) 調査地点について

2. 発掘調査遺跡周辺の遺跡と歴史環境

3. 調査経過の成果

(1) 縄文時代

(2) 古墳時代

4. まとめ

報告書抄録



図 1 遺跡の位置と周辺遺跡 (1/2.5 万、多古)

1. 遺跡の概要

(1) 遺跡周辺の地形

横芝光町は、千葉県東部の太平洋の波が洗う九十九里浜の中ほどに位置し、その中央には同平野で最も大きい河川である栗山川が流れている。町内は北西部を侵食が進んで丘陵のようになった下総台地の東辺が起伏し、南東部を水田や低湿地・砂州などの低地地形が広がる、大きく二つの地形区分からなっている。台地や砂州等の高地には、クスやシイの木に代表される照葉樹林が繁茂し、低湿地には水田や蓮田、葦原が広がる温暖な気候のところである。

発掘調査した中台 A 遺跡は、栗山川の西側で、その支流の高谷川の南側を遡る台地の中ほどにあり、北と南から侵食され、東西に延びる台地の尾根部に当たり、最高所で標高 42m を測る平坦部の少ない地形に占地する。遺跡には縄文時代中期の土器片が多数散布し、また調査地の西 100m には同時期の地点貝塚があったが、現在は見られない。



写真 1 調査前の遺跡

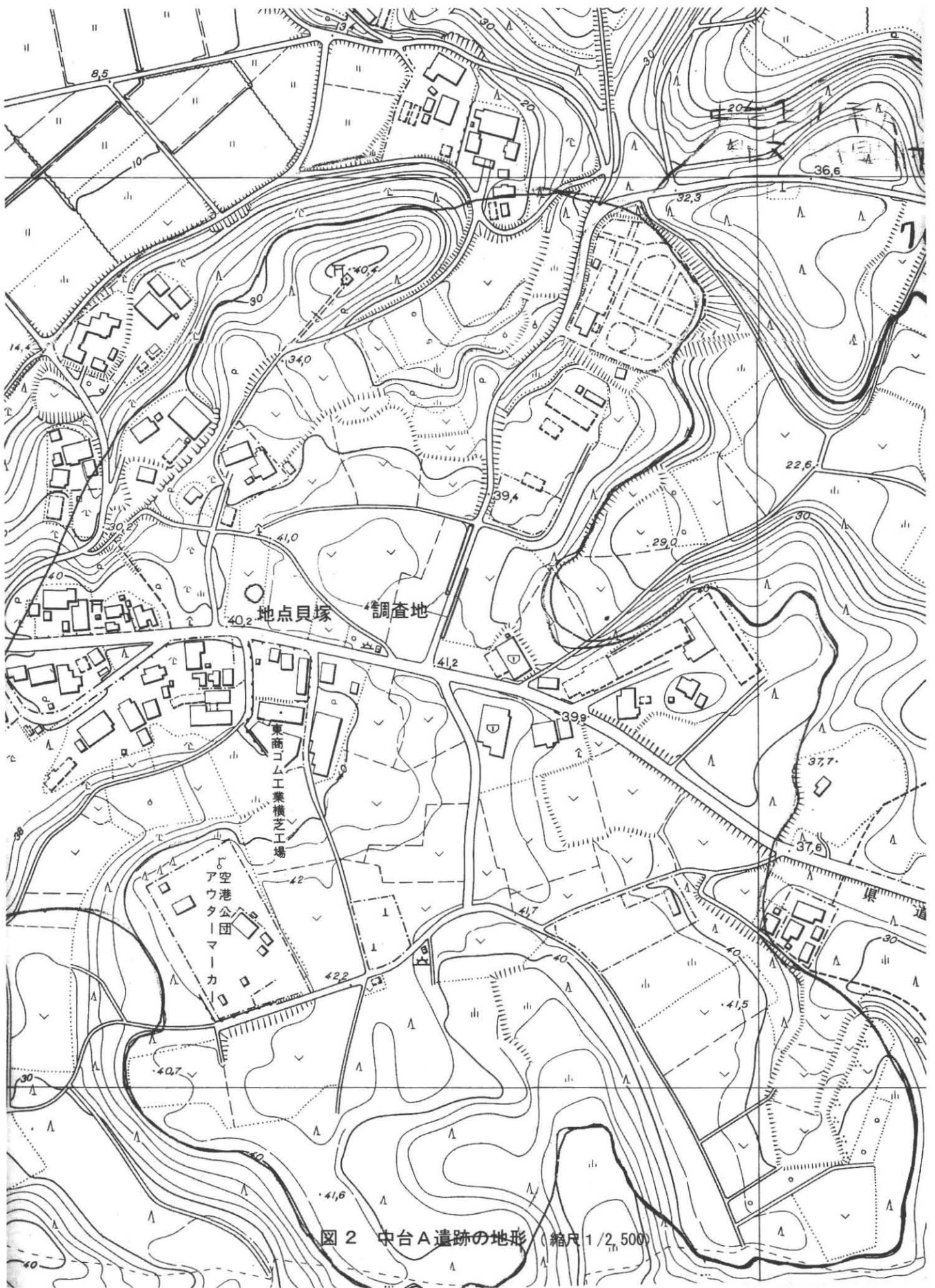


図2 中台A遺跡の地形 (縮尺 1/2,500)

(2) 調査地点について

中台A遺跡における今回の調査地点は、遺跡のほぼ中央を東西に走る県道横芝・山武線から、北へ向かって牛熊へ通じる町道Ⅱ-1号線の両側、幅1m、延長80m、約80㎡を対象とした。本地点は遺跡の中央より少し北に位置し、標高が41~40mを測り、北への緩い傾斜が始まる所で、北東側から谷津が入り、東へも緩く傾斜している。この地点周辺の畑地には縄文時代中期の土器片が多く散布し、試掘で検出した遺構は同時代のものと推定された。

2. 発掘調査遺跡周辺の遺跡と歴史環境

中台A遺跡の周辺台地上には、西側に中台E遺跡②、さらにその西には国指定史跡である中台古墳群の殿塚・姫塚④がある。目を南に移すと小谷を隔てて東長山野遺跡⑨・北長山野遺跡⑧、西長山野遺跡⑦・上仁羅台遺跡⑥、遠山天の作遺跡、山武姥山貝塚などがあり、旧石器時代から中世に至る、著名な遺跡が分布する町内でも遺跡の宝庫である。中でも中台E遺跡、東長山野遺跡、山武姥山貝塚などは、縄文時代中期の遺跡として知られ、本遺跡との関連も考えられる。

3. 調査成果

町道の両側、幅1m、延長80mのトレンチ状に発掘調査した結果、ほぼ中央部で溝が検出されたのみであった。道路西側では畑地の客土と現道建設時すでに掘削されていたため、原地形を有している所は少なく、中央部で遺構を1基検出したのみであった。道路東側では西側で検出された溝の延長と推定する遺構があったほかは、小さな風倒木が検出したただけであった。

現地表及び旧地表から遺構を確認できるローム層まで、深さ30cmの表土及び旧表土が堆積し、表土中から遺物が多数出土したが、遺物包含層の形成は見られなかった。道路工事も平行して進められ、北部では切土断面で立川ローム層下部（層厚約1.2m）まで観察できたが、旧石器時代の遺物は確認できなかった。

調査区域内及び遺構からは縄文土器が多数出土し、その時代の遺構が期待されたが、検出した溝は後世のもので、その的はずれた。以下、時代順に検出した遺構・遺物について説明を加える。



写真1 調査中の遺跡

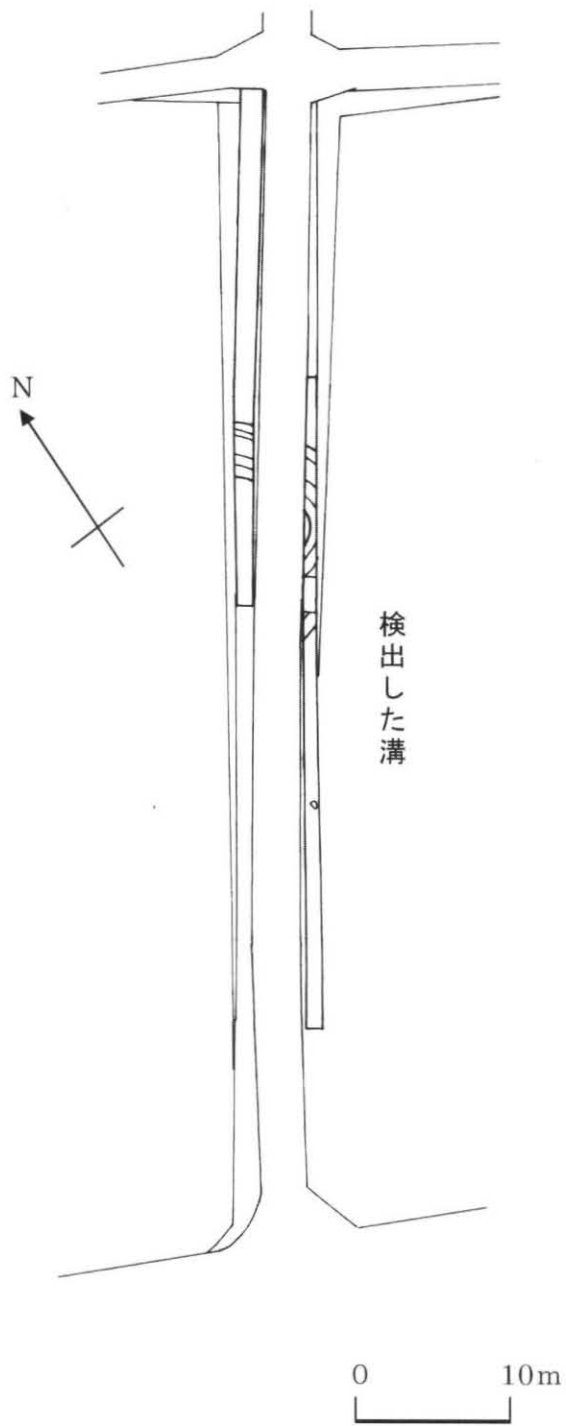


図3 調査範囲全体図



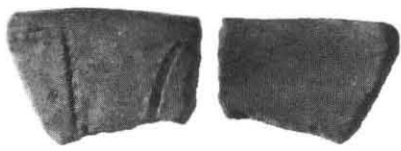
写真2 調査中の遺跡



写真3 調査中の遺跡



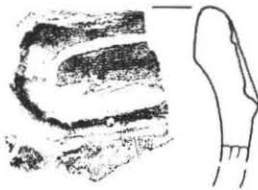
写真4 発掘中の遺構



1 縄文中期

(阿玉台 I)

色調 黒色
焼成 良好
胎土 砂



2 縄文中期

(阿玉台 I)

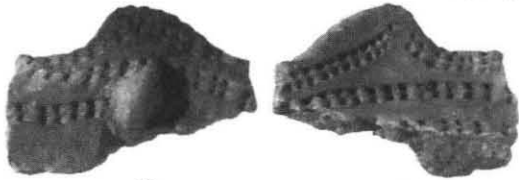
色調 黒色
焼成 良好
胎土 砂



3 縄文中期

(勝坂)

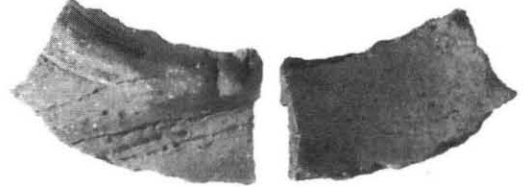
色調 黒色
焼成 良好
胎土 砂



4 縄文中期

(阿玉台 I)

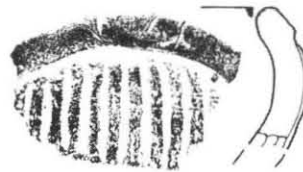
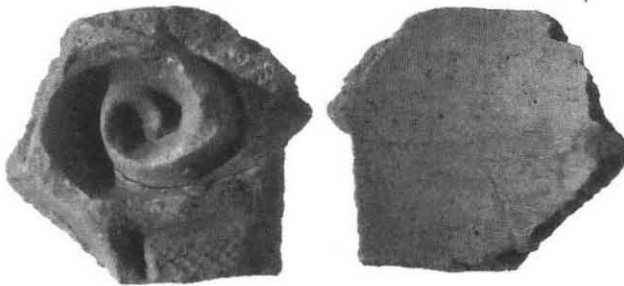
色調 黒色
焼成 良好
胎土 砂



5 縄文中期

(阿玉台 I)

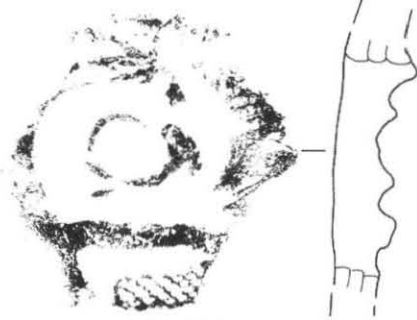
色調 褐色
焼成 良好
胎土 花崗岩粉



7 縄文中期

(加曾利 E I)

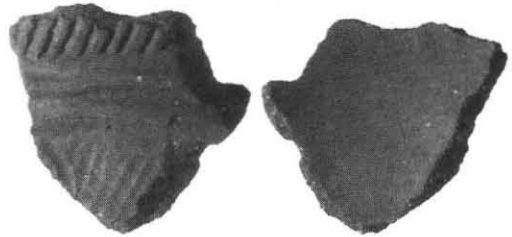
色調 暗赤褐色
焼成 良好
胎土 砂



6 縄文中期

(加曾利 E II)

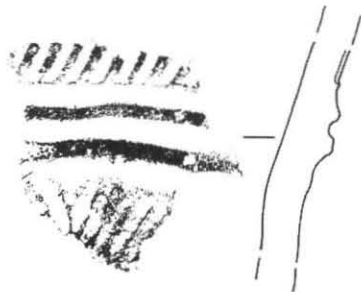
色調 黒～褐色
焼成 良好
胎土 砂



8 縄文中期

(加曾利 E I)

色調 暗赤褐色
焼成 良好
胎土 砂



9 縄文中期

(加曾利 E I)

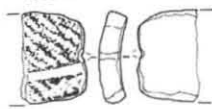
色調 暗赤褐色
焼成 良好
胎土 花崗岩粉



10 土器片錘

(加曾利 E)

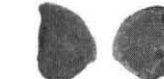
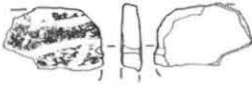
色調 暗赤褐色
焼成 良好
胎土 花崗岩粉



11 土器片錘

(加曾利 E)

色調 黒褐色
焼成 良好
胎土 砂



12 土器片円板

(加曾利 E)

色調 暗赤褐色
焼成 良好
胎土 砂



図4 出土した縄文土器



(1) 縄文時代

本遺跡で出土した遺物で最も古いものは縄文時代中期の土器で、発掘地点の周辺で採集及び発掘区域内で出土した土器は、同時代中期の阿玉台式から加曽利 E 式で占められた。(図 3)

1 群 出土した土器を分類して 1 群としたものは、断面三角形の貼り付け隆帯に沿って半裁竹管を施文具にして連続爪形文を施した文様を基調とし、口縁部の窓枠状文や胴部の Y 字状文などで構成されている。この一群の土器の胎土には、花崗岩を砕いた粉末を混入しているものが多いが、本遺跡出土のものは混入度合いが多くない。爪形文が小さく、単純な文様構成のものから、隆帯による構成を造るようになったもので、阿玉台 I 式から同 II b 式までが、本群の主体となす(図 3、1～5)。

2 群 2 群とした土器は、縄文を地文として、沈線と断面台形の隆帯などで文様構成され、口縁部では渦巻きや区画沈線などが造られている。地文の縄文は幅 5 mm ほどの単節縄文が多く、施文部位によって施文方向が異なる。口縁部の渦巻き文や区画文から、加曽利 E I 式から同 II 式までがほとんどである(図 3、6～9)。

縄文時代の土器片を加工して再利用した遺物がある。今回の調査では 2 点の土器片(図 3、10・11)と円板(同 12)が出土した。

縄文時代中期のこの時期では、すぐ西に隣接する中台 E 遺跡や、小谷を隔てた南にある東長山野遺跡があり、特に後者出土の土器と文様・胎土等を比較すると、共通するところが見られるところから、密接な関係があったと考えられる。

(2) 古墳時代

検出した溝の底面からは、古墳時代後期の須恵器甕片が出土し、この溝が同時期の所産であることが推定された。

溝 この溝は道路西側で発掘し始めたとき、出土する遺物に縄文土器が多かったため、当初、縄文時代の住居跡と思われたが、底面付近から古墳時代後期の須恵器甕片が出土し、溝の側縁立ち上がりは緩い傾斜であり、その延長が道路東側で検出されたことから、溝と断定した。しかし、西側で検出した溝は、調査区に対して斜行し、確認面から深さ 20cm で露出した底面がほぼ平坦で、貼床のように硬く踏み固められていた。その延長である東側では、南へ回り込むように曲がり、ここでは底面が軟弱になり、平坦ではなくなっている。溝は南に向っているが、途中で掘削で消失し、追跡が困難になった。この溝の性格は、この調査だけでは断定することは困難である。

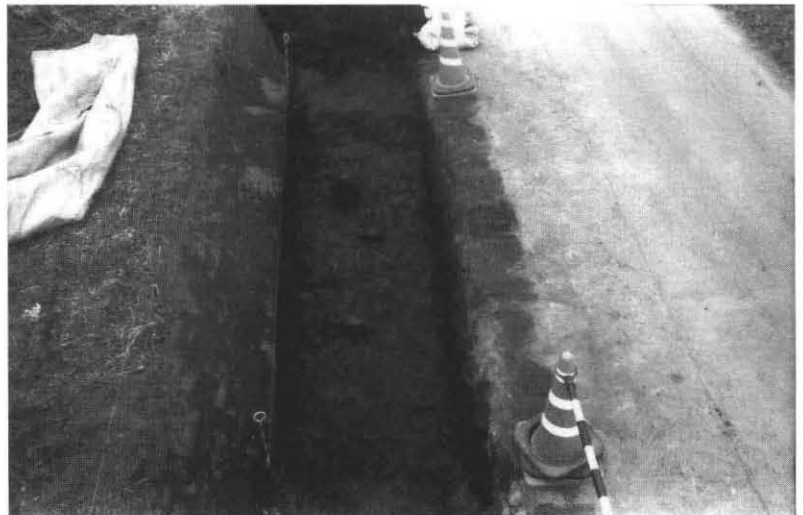


写真 5 発掘した溝

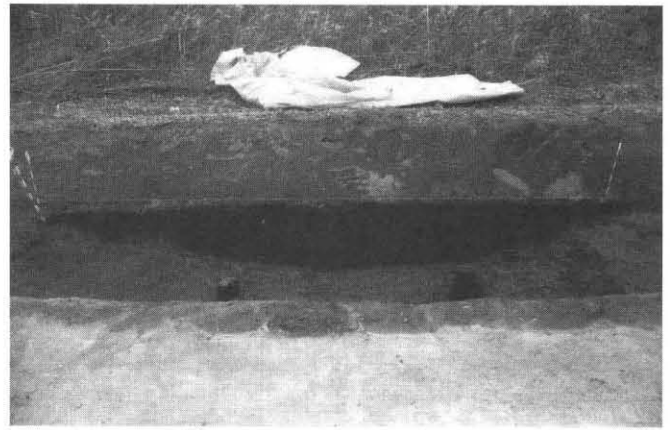
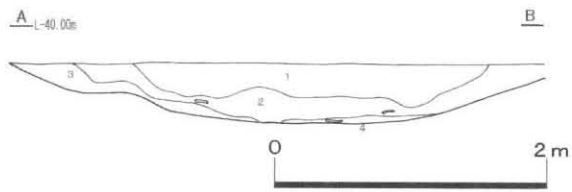
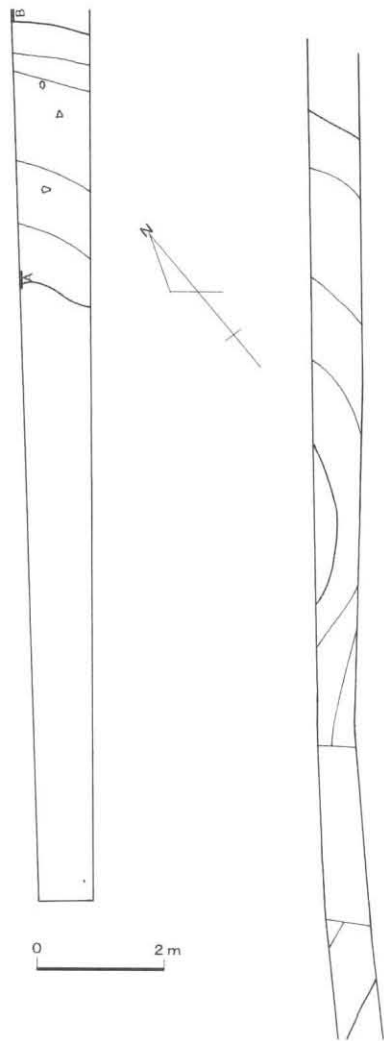


写真6 溝断面



写真7 発掘した溝

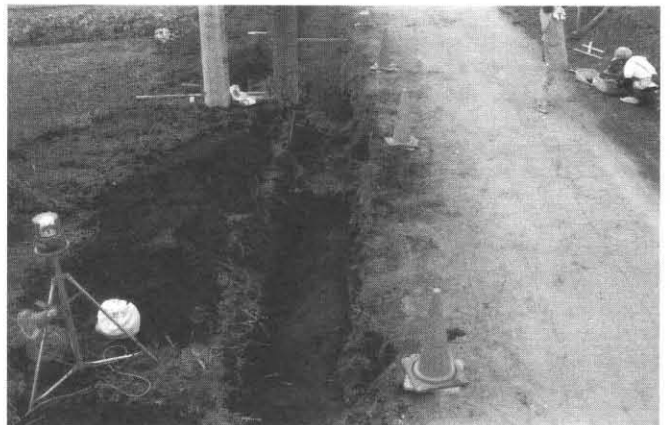


写真8 東側の溝

- 層序
- 1 黒褐色土（ローム細粒が少し混じり、軟質）
 - 2 黒褐色土（ローム細～中粒が混じり、軟質）
 - 3 暗褐色土（ローム細～中粒が多く混じり、軟質）
 - 4 暗褐色土（ローム細粒が混じり、硬質）

図5 検出した溝の平面図と断面図

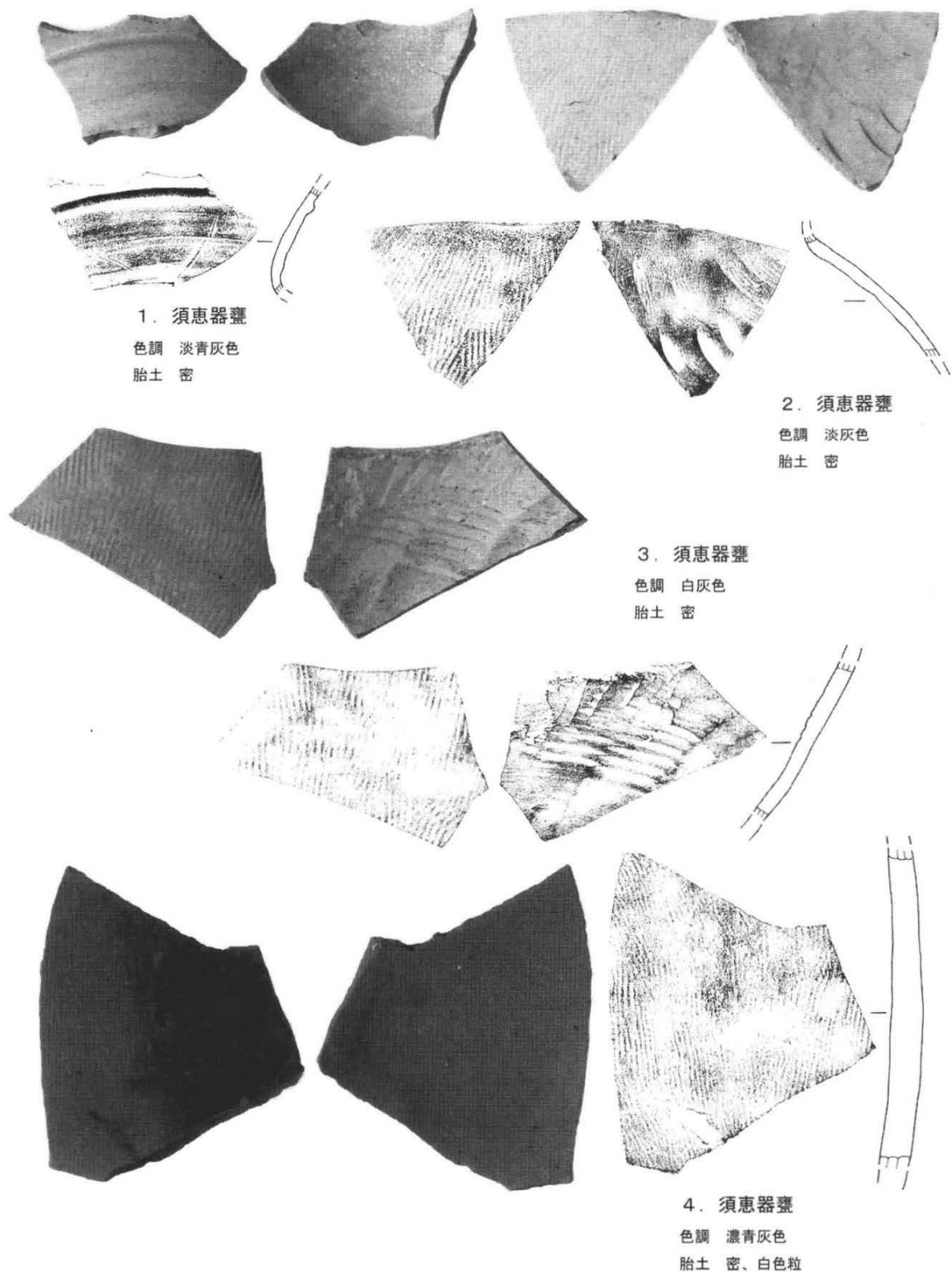


図6 溝出土遺物

溝からは須恵器甕の破片が4点出土した。4点の破片は頸部から胴部で、色・胎土に差が見られ、それぞれ個体が異なる。胎土と焼成の特徴から、東海諸窯の産地と推定され、古墳時代後期7世紀の所産と考えられる。

このほか、調査区域内からは土師器小片が出土し、須恵器の年代とほぼ変わらないものであることが確かめられた。

4. まとめ

今回の調査は、道路改良工事に伴うもので、その範囲が限定的であったため、明らかになったことは少なかった。それでも古墳時代の溝と、縄文時代の遺物が出土したことは、この遺跡の性格を知る手がかりとなった。

本遺跡の周辺には、縄文時代中期の遺跡が点在し、その中でも東長山野遺跡は集落跡が発掘され、多くの土器が出土し、その共通性も認められた。その土器を分析することによって、この地域の縄文中期における遺跡構造、共同体形成が考察されると思う。

溝はその形状から古墳の周溝とも考えられ、中台古墳群の殿塚・姫塚を中心とする古墳の分布の広がりが見込まれ、この地域の古墳文化の解明の一助となろう。

報 告 書 抄 録

ふりがな	なかだいえいせいせき							
書名	中台A遺跡							
副書名	町道Ⅱ-1号線改良工事に伴う埋蔵文化財調査							
シリーズ名								
シリーズ番号								
編著者名	道澤 明							
編集機関	横芝光町教育委員会							
所在地	〒289-1727 千葉県山武郡横芝光町宮川11907-2 TEL0479-84-1358							
発行年月日	西暦 2010年3月31日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
なかだいえいせいせき 中台A遺跡	ちばけんさんぶぐんよこしばひかりまち 千葉県山武郡横芝光町 なかだい 中台853-4外	12410	Y 7-1	35° 40' 53"	140° 26' 20"	20091015 ～ 20091022	80m ²	道路改良 工事
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物		特記事項		
中台A遺跡	包蔵地 貝塚	縄文 古墳	溝	縄文中期土器 土師器・須恵器		道路拡幅部分両側 幅1m、延長80mを 調査。古墳周溝の可 能性のある溝を検出。		

平成 22 年 3 月 31 日印刷
平成 22 年 3 月 31 日発行

横芝光町中台 A 遺跡発掘調査報告書
—町道Ⅱ-1号線改良工事に伴う埋蔵文化財調査—
発行 横芝光町
横芝光町教育委員会
千葉県山武郡横芝光町宮川 11907-2
印刷 株式会社 エイティ一
